Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-26

現象学的人間学的心理療法 : 書評：霜山徳爾『素足の心理療法』（みすず書房、2012年）

本林, 良章

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,26:140-144

(Issue Date)
2014-11-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010333

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010333

現象学的人間学的心理療法

——書評：霜山徳爾『素足の心理療法』(みすず書房、2012 年)

本林良章

霜山徳爾(1919～2009)は、日本の臨床心理学の樹立に大きな役割を果たした心理学者である。ここでは、みすず書房より新編集のもとで出版された『素足の心理療法』(以下本書とも記す)に関する考察を試みる。本書の主題は心理療法という臨床的営みであるが、それは流派の違いを超えたところにある素足の心理療法であり、それ故、ここには治癒或いは治癒的な対人関係に関する医学哲学的含意が満ちている。最後には、本書に込められたそうした含意に筆者の手の及ぶ範囲で言及したいと思う。

素足の心理療法

まず本書を読むに当たっての私自身の問題意識を記すことで、本書の持つ意義の一端を明らかにしたい。村上が指摘しているように、現象学的・人間学的精神病理学の仕事の多くは精神病の病理構造の解明に向けられており、治癒を主題的に扱った研究は少ない(村上 2011, 6 頁)。もちろん、国内のみに眼を向けても、内海や松尾の著作は統合失調症の回復や治療を現象学的に論じている(内海 2008; 松尾 1987)。また近年出版された村上の『治癒の現象学』は治癒それ自体を哲学的テーマとして扱っている点で稀有である(村上 2011)。しかし、心理療法の技法の違いを越えたところにある治癒そのものを扱う現象学的文献は、病理を扱うそれと比してやはり少ない。

ブランケンブルク、木村、スタンゲリーニに学びながら統合失調症を共通感覚の病理として考えてきた私にとって(ブランケンブルク 1978, 木村 2005, Stanghellini 2004)、当然共通感覚の回復ということも課題として念頭にある。事実、共通感覚の回復を主題とする研究も存在する(岡本 2003)。しかし、精神疾患はそもそも完全治癒が難しい上、たとえ精神科医の治療により症状が消え寛解に到ったとしても、そのことは今後再発しないことの約束にはならない[(1)]。また診断上は精神病でない健常者が大きなストレスなど精神的な問題を抱えていることもあり得る。これらを考慮すると、私の中で、精神疾患の臨床的な治癒そのものに加えて「治癒的な生き方」とでも言うべきも

のへの関心が強くなってきた[2]。認知行動療法や精神分析等、心理療法には個々の流派があるが、そうした流派ごとの臨床技法や狙いの違いを越えたところにある治癒的な在り方(これは患者本人のみの在り方のみならず、支援者と患者の関係性の在り方を含む)そのものを問題とする心理療法が私の関心の的である。霜山の『素足の心理療法』はそうした「現象学的人間学的心理療法」(306)を描いている。「心理療法上の原理、主義、理論、技法というものが『生きられず』、何か物差しのようなものならば、あるいは道具や技法のようなものならば、それらは尊重に価しない。……素足であることは生の事象に対して虚心坦懐に、素直に対することである」(35)。ただし、私が『素足の心理療法』に魅かれた要因はこの素足性以外に次節で着眼する宗教性にある。

宗教哲学

『素足の心理療法』の著者プロフィール欄には、「宗教哲学・心理学専攻」と書かれている。事実、霜山の心理学は宗教哲学的な色彩が強い。霜山は西洋のキリスト教と東洋の宗教の双方に足をかけて人間を論じる。「……原則的には、個人として犯すべからざる一個の人格の存在を、一歩も退かず守り通す、西欧的、キリスト教的人間観が、無意識的にせよ、何らかの形で基盤にあるさまざまな療法にひかれると同時に、東洋の静謐な、人間の一生をあたかも大いなる無がたまゆらに夢みたものと考え、積極的な断念の自己洞察のうちに生きることもきわめて魅力的であり、心理療法もそれによることを考えたりする」(148)。こうした西と東の両方の宗教的な立場を踏まえて展開される方法に対する批判もあったと言う。「ある一流の精神分析医は、そのような一貫性のない私のやり方を強く批判して、『あなたは片方の足を一つの舟に、もう一方の足を他の舟にのせているようなものだ。今に水の中に落ちるにきまっている』と言った。『……お言葉を返すようですが』と私は丁寧に、しかし相手の眼をまっすぐ見ながら答えた。『私は初めから水の中におります』」(149)。

推し量るに「水の中」というのは苦界という程の意味であろう[3]。患者は、否、人間はそもそも苦界の内にあり、治療者はそのことをわきまえる必要がある。『素足の心理療法』は著作集第六巻『多愁多恨亦悠悠』に収録されているが、ここには心理療法の問題集が含まれていて、その一が次の問いである。「『人間に対する深い愛情と、しかし同時に人生に対するペシミズムなくしては、いかなる心理療法もあり得ない』

(或る臨床心理学者の言葉より)何故か。」(霜山 2000, 55 頁)。また本書末尾の言も引用しておこう。「人生は、そして人間存在は、一種の拡散した遠い悲劇……根源の憂愁を帯びた悲劇である。しかし悲劇を真実のものにしたいならば、できるだけそれを避けなければならない。心理療法の目的はここにある」(152)。霜山はあくまでもペシミズム、人生に関する悲劇的な見方を貫く。

全集一巻及び本書の解説者である妙木も、霜山が人間存在の悲劇性を埋める方向から宗教的・神秘的なものに対する関心を初期から持ったという推論を提出している(霜山 1999 と本書所収の解説)。妙木はこの神秘的なものを「運命」に近いとしている(霜山 1999, 317 頁)。たしかに霜山の著作を紐解くと、運命的なものに関する記述は多い。例えば、霜山は精神医学の内因性という概念の内に運命的なものを重ねる(208ff.)。しかし、霜山は運命的なものに身を任せるという単なる諦念を勧めるわけではない。運命的なものに左右され苦界に生きるという悲劇性を一端は認めるというペシミスティックな前提を踏まえつつも、時としてそのモイラに抗うという積極性が霜山の立場には加味されているように思われる(霜山 1999, 51 頁)。

治癒と信頼

最後に素足の心理療法、つまり現象学的人間学的心理療法の治癒論の要と思われる部分のみを抽出する。

霜山はビンスワンガーの「ラポールの心理学」に度々言及する(ex. 霜山 2001, 55 頁)。彼の心理療法はラポールつまり信頼に重きを置くものである。引用する。「……信頼は心理療法を支える通奏低音でもあり、また時には哀しく美しい旋律の主題ともなるものであり、そのヴァリエーションを展開するものでもある。信頼というものはこちらから要求したり、強制する性質のものではなく、あくまでも先方から贈られるものである」(77)。ここで言う「先方」とは第一義的には患者を意味するのであろうが、おそらく患者と治療者の「あいだ」(木村敏)の「自然」の場所を本来的には指すのではないだろうか[(4)]。信頼は自他のあいだの深い場所から贈られるのである。患者にとって、自らが抱える病をいかに引き受けて生きていくかということが問題になる。臨床家による心理療法や友人や家族の対人関係が患者の生の支えになり得るとすれば、それは詰まるところ患者自身と支援者のあいだの信頼という一点に懸かっている。

霜山の議論を引き継いで、宗教哲学的な立場から心理療法や治癒を論じることが今

後の課題としてある。例えば、親鸞の「自然法爾」や田辺の「懺悔道」の立場から、人間の治癒的な生き方を考えることは可能であろうか。病の完全な臨床的治癒は難しくとも、或いは難しいからこそ、ある種の運命愛或いは諦念を抱えた生き方こそが治癒的になり得るのではないだろうか。本書を通じてそうした課題を認識できたことは、私にとって収穫であった。

註

(1) 村上は、木村との対談(木村＋村上 2010)に触れ精神疾患の治癒の難しさや、治癒と「ある程度の日常生活や社会活動が可能になる水準になること」である寛解の区別に言及している(村上 2011, 8 頁)。

(2) この方向へ関心が強まった背景には、北海道浦河にある「べてるの家」の活動を知り、それを訪れた経験が大きく関係している。

(3) なお苦界や後述する運命に関する霜山の議論は、九鬼の発想と極めて近い。九鬼によれば「諦め」、「運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心」は、「いき」の「微表」の一である(九鬼 2003, 44 頁. 強調原文)。「要するに『いき』は『浮かみもやらぬ、流れのうき身』という『苦界』にその起源をもっている。そうして『いき』のうちの『諦め』したがって『無関心』は、世智辛い、つれない浮世の洗練を経てすっきりと垢抜した心、現実に対する独断的な執着を離れた瀟洒として未練のない恬淡無碍の心である(九鬼 2003, 45 頁. 註記号及びルビ略)。加えて「素足」ということが、「いき」であるとされる(九鬼 2003, 101-2 頁)。

(4) 木村への言及(44f.)、自然への言及(ex. 119)、ある文化人類学者への言及(39f.)などを参照。また詳細な比較検討は別の機会に譲るが、「信頼」と例えば幼児と母親のあいだの「潜在空間」の関連を示唆するウィニコットの見解も重なるだろう(ウィニコット 1979; 岡本 2003, 1197 頁)。

文献

『素足の心理療法』からの引用・参照は頁数のみを記した。

ブランケンブルク, ヴォルフガング『自明性の喪失』、みすず書房、1978 年。

木村敏『あいだ』、ちくま学芸文庫、2005 年。

木村敏＋村上靖彦「統合失調症と自閉症の現象学」『現代思想』、第 38 巻 12 号、青土社、2010 年、34-58 頁。

九鬼周造『いきの構造』、藤田正勝全注釈、講談社学術文庫、2003 年。
松尾正『沈黙と自閉――分裂病者の現象学的治療論』、海鳴社、1987 年。
村上靖彦『治癒の現象学』、講談社、2011 年。
岡本慶子「統合失調症における共通感覚の回復について：友人関係「たわむれあい」を通して」『精神神經學雑誌』、第 105 巻第 9 号、2003 年、1186-1205 頁。
霜山徳爾『明日が信じられない』(霜山徳爾著作集 1)、学樹書院、1999 年。
霜山徳爾『多愁多恨亦悠悠』(霜山徳爾著作集 6)、学樹書院、2000 年。
霜山徳爾『現存在分析と現象学』(霜山徳爾著作集 3)、学樹書院、2001 年。
Stanghelllini, Giovanni. *Disembodied Spirits and Deanimated Bodies: The Psychopathology of Common Sense*, Oxford: Oxford University Press, 2004.
内海健『パンセ・スキゾフレニック―統合失調症の精神病理学―』、弘文堂、2008 年。
ウィニコット, D.W.『遊ぶことと現実』(現代精神分析双書第 II 期第 4 巻)、橋本雅雄訳、1979 年。

謝辞

本研究は JSPS 科研費(特別研究員奨励費) 25・6377 の助成を受けた。また筆者は、北欧研究ネットワーク・2014 年第 6 回研究会(2014 年 9 月 22 日、NIAS(コペンハーゲン大学))における発表「共通感覚の現象学的研究―交差する哲学・精神医学・心理学」の際に、本原稿を紹介する機会を得た。

(日本学術振興会特別研究員 PD・神戸大学)